



歯学だより Vol.12

(平成 28 年度広報誌)



2017 年

岡山大学歯学部

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 歯学系

岡山大学病院 歯科系 広報専門部会

目次

◇学部長より

「岡山大学歯学部における歯学教育の現状と将来展望」 岡山大学歯学部長 浅海淳一 4

◇副研究科長より

「大学院教育改革と医歯薬学総合研究科歯学系の現状分析」
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 副研究科長 大原直也 8

◇副病院長より

「平成 29 年度の岡山大学病院歯科系の診療方針」
岡山大学病院副病院長 診療(歯科)担当病院長 宮脇卓也 11
「歯科教育・研究担当副病院長に就任して」
岡山大学病院副病院長(歯科系教育・研究担当) 飯田征二 13

◇退職・転出・着任教員より

【ご退職】

「定年退職にあたって」 口腔機能解剖学 杉本朋貞 15

【ご転出】

「転出のご挨拶」 柳田矯正歯科かなこ小児歯科クリニック院長 柳田剛志 16
「退職のご挨拶」 徳島大学 大島正充 17
「転出のご挨拶」 医療法人賀新会玉島第一病院 前川享子 18

【ご着任】

「2 度目の着任ご挨拶」 矯正歯科 石原嘉人 19
「着任のご挨拶」 歯科保存修復学 島田康史 20
「着任のご挨拶」 小児歯科 仲 周平 21
「着任のご挨拶」 口腔微生物学 橘 理人 22
「着任のご挨拶」 口腔形態学 岡村裕彦 23
「着任のご挨拶」 歯科放射線学 竹下洋平 25
「着任のご挨拶」 予防歯科 片岡広太 26
「着任のご挨拶」 歯周病態学 高知信介 27
「着任のご挨拶」 インプラント再生補綴学 笈田育尚 28
「着任のご挨拶」 歯科薬理学 岡元邦影 29
「着任のご挨拶」 スペシャルニーズ歯科センター 野島靖子 30
「着任のご挨拶」 歯科保存修復学 横山章人 31

◇【岡山歯学会論文賞受賞者寄稿】

「岡山歯学会奨励論文賞を受賞して」 口腔外科(病態系) 村瀬友里香 32

◇【卒後臨床研修センターより】

「平成 29 年度における研修歯科医の評価基準の変更について」 総合歯科 河野隆幸 33

◇【歯科衛生士室から】

「平成 28 年度歯科衛生士室活動報告」 診療支援施設 歯科衛生士室 三浦留美 35
千神八重子

◇【技工室から】

「平成 28 年度技工室活動報告」 診療支援施設 技工室 太田圭二 38

◇【編集後記】

小児歯科 平野慶子 41

「岡山大学歯学部における歯学教育の現状と将来展望」

岡山大学歯学部長

浅海 淳一



平成 28 年度から歯学部長を拝命し、1 年が過ぎました。歯学領域では、この 1 年間にいろいろな問題が提起され、その対応を求められました。歯学教育モデル・コア・カリキュラム平成 28 年度改定版(案)が示され、「歯科医師として求められる基本的な資質・能力」の実質化、診療参加型臨床実習の充実、超高齢社会への対応、臨床実習開始までの基礎模型実習を含めた技能教育に関する学修目標の新設等に新たに対応するよう求められています。国家試験には、臨床試験の項目が含まれており、昭和 58 年度までは国家試験でも臨床試験が、実施されていました。現在、文部科学省では、臨床試験再開の検討が進められており、まずは、医療系大学間共用試験実施評価機構が行う臨床実習後客観的臨床能力試験(仮称)で、その対応を進める予定のようです。岡山大学歯学部でも、臨床実習後客観的臨床能力試験の評価については実施要項に記載のとおり進める予定ですが、実施方法については検討したいと思っています。平成 27 年度に岡山大学歯学部で実施された米国 CODA の監査委員による分野別認証評価の試行において、日々のコンピテンシーに基づいた評価が重要であるとの指摘を受けたことを踏まえ、岡山大学歯学部独自の臨床技能の評価と合わせて臨床実習後客観的臨床能力試験の評価を検討したいと考えています。

岡山大学歯学部では、平成 28 年度から 60 分・4 学期制を完全導入し、この期に大幅なカリキュラム改善を図りました。3 年次編入制度に変わり、2 年次編入制度を導入できたことにより、大幅なカリキュラムの改善が実現できました。教育力強化のために、教養教育科目に加え専門教育科目を加え、1 年間に登録できる単位を増加し、その中で、「学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る」学修(能動的学修;アクティブラーニング)も導入しています。さらに、平成 28 年度から臨床予備実習の開始を 5 年次の 10 月から 7 月に移動し、3 か月早めました。平成 29 年度にはさらに進めて、CBT と OSCE を 7 月中に実施する予定にしています。このことにより、9 月には 5 年次と 6 年次が同時に屋根瓦方式で臨床実習を行うことが出来るようになりました。平成 28 年 10 月 3 日には、臨床実習が始まる歯学部 5 年次生に対し、9:00 から歯科医師になるための重要なステップと位置づけた第 1 回目の Student Dentist 認証式を挙行し、認定書を授与しました。学生代表から誓いの言葉があり、参加した学生は、決意を新たに始まる臨床実習への意気込みを誓いました。28 年度当初に文部科学省から求められた第 3 回フォローアップ調査において指摘された歯学教育モデル・コア・カリキュラムの臨床実習に対する項目に関しても、改善計画として、記載の全項目について、自験が必要であることを「臨床実習実施要項」に明記し周知を図るとともに、平成 28 年

9 月から開始した臨床実習で実施したことで対応済みです。臨床実習では自験以外に、学生にとって有効であり、社会に役立つ学生を育てるための基盤整備が重要であるとの考えの下、平成 26 年度から臨床実習の充実のため、臨床実習の位置付けの明確化（履修要件の設定、Student Dentist の制定）、カリキュラム改訂（実習期間の延長、屋根瓦方式の導入）、教育体制の見直しと強化（指導教員資格の設定、臨床実習運営への学生参画、地域との連携教育体制構築、電子ログブックの開発・運用、外部評価の実施）に取り組みました。地域との連携教育として行っている在宅・訪問歯科診療実習は、22 機関（開業歯科医院及び病院歯科）と協定を締結し、臨床実習生は、全員派遣先機関から指導医同伴のもとで在宅患者歯科診療や要介護者のリハビリテーションに参加しています。自験に当たっては、在宅・訪問歯科診療実習用のシミュレーション教育を開発し、事前教育を行った上で実習に送り出しています。文部科学省の支援を得て取り組んでいる健康長寿社会を担う歯科医学教育改革の一貫として、在宅・訪問歯科診療実習を実施していますが、さらに医科歯科連携、他職種連携を進め、超高齢社会に貢献できる歯科医師を養成したいと考えています。以上の内容が十分に遂行されているかどうかの評価を受けるため、歯学教育分野別認証評価については、平成 29 年 1 月 16 日、17 日にトライアルを受審しました。さらなる向上が期待される点をいくつか指摘されましたが、改善を必要とする点はなく、概ね良好な評価を受けました。この評価を参考に、さらに向上を目指したいと思います。

国家試験合格率が、実質 53.8%と低下しています。岡山大学歯学部では、質の高い学生に対して歯科医師養成を行っており、臨床実習においても努力を重ね優秀な学生を卒業生として社会に送り出しています。そういった中で、10 名程度（20%程度）の不合格者がいることは残念な結果であり、改善を要すると考えています。学生募集に関しては、本学は、関西圏において、歯学部生の学生定員が少ないことを反映して、中四国圏のみならず兵庫県、大阪府からの関西圏からの志願者が多く、卒業後の勤務地についても、岡山県のほか兵庫県、大阪府が多い状況にあります。一方、人口あたりの歯学部入学定員数の割合は、近畿地区が最も低く、次いで中四国地区となっています。そうした中で、岡山大学は、中四国圏および関西圏の質の高い学生を受け入れて養成する国立大学として機能したいと考えています。歯学部には医学部志向で入学する学生も少

なからず在籍しており、臨床実習に入った時点で歯科医師が自身の適性に向かないとして他学部を再受験する者が見受けられます。この状況を改善すべく、現在では、歯学部入学当初に、卒業後は歯科医師のほか、教育・研究者、保健行政職等多岐に亘るキャリアがあることを明示するなどキャリア教育を行っており、改善傾向にあります。また、歯科医師過剰と言われていますが、高齢化しつつある団塊の世代の方が多いと理解しており、そのことを考慮すれば決して過剰とは考えていません。歯科医師国家試験の合格者数を抑制し、若者の未来の障害とならないようにしなければなりません。さらに、過剰だから減らすことを考える前に、歯学部卒業生をこれまでのこと意外にどのように活用できるかということを考える必要があると思います。そういった意味で、歯科界では、新たなキャリアプランニングを進める必要があると考えています。

世界的に国際交流が推進されています。岡山大学でもこれまで部局間協定を 21 校、大学間協定を 8 校締結し、交換留学生の派遣に関しては、平成 13 年～28 年の間に 125 名、受け入れに関しては、平成 24 年～28 年に 79 名に達しました。これは、国際交流委員会および歯学教育・国際交流推進センターをはじめとして、教職員の努力のたまものと思います。平成 28 年度も、歯学部生を 14 名、8 か国に派遣し、7 か国、8 施設から歯学部生を 26 名招き、ウエルカム事業、英語授業シリーズ、倉敷美観地区・吉備津神社等の小観光旅行を実施しています。この学部生の海外派遣事業は、JASS 奨学金により支援を受けており、平成 29 年度の JASSO 奨学金も、派遣、受入共に継続して採択されています。教員レベルの国際交流事業は、JST のさくらサイエンスプランに 2 件採択、ベトナム北部 2 大学とインドネシアから、各々 2 名（総計 6 名）の歯学部教員を招聘、共同研究事業を行いました。ミャンマーのマンダレー歯科大から、臨床修練医として歯科医師 1 名を招聘、口腔外科、歯科麻酔の研修を行い、また、ミャンマー国から歯科医師を 2 名招聘、口腔がんの細胞診を中心とした研修、ミャンマー国の口腔保健活動で口腔外科医 2 名が口腔がん検診を実施しています。このように国際交流を岡山大学歯学部でも推進しています。

27 年度には山本敏男教授、28 年度は杉本朋貞教授が退職されたことから、歯学部では、この 1 年間で、両件を含み、計 4 つの歯学系基礎分野の教授選考を進めました。その結果、機能再生・再建科学専攻 口腔・顎・顔面機能再生制御学講座 口腔機能解剖学分野(仮称)に沢 禎彦先生、機能再生・再建科学専攻 生体機能再生・再建学講座 口腔形態学分野(仮称)に岡村裕彦先生、生体制御科学専攻 生体薬物制御学講座 歯科薬理学分野(仮称)に岡元邦彰先生を迎えることになりました。現在も、新しく創設された「統合歯科医療管理学分野(仮称)」の選考を行っています。新しく赴任する教授にはご活躍いただきたいと思います。

岡山大学では岡山大学メディカルセンター(OUMC)(仮称)の構想が進められています。岡山市内、さらには岡山県内には大きな公的病院がたくさんあり、各病院が競争する中、過剰な設備投資が行われてきました。また、医療従事者や病床数などの医療資源も全国的に見て恵まれた地域ではありますが、今後人口が減少する中で、今のままの医療供給体制では、立ちゆかない状況が近い将来に到来すると言われています。このため、岡山大学が中心となり、教育・研究機能をより強化された OUMC を設立することにより、岡山市内の 6 つの公的病院が地域医療連携推進法人としてまとめ、日本一の規模と質を持った医療・研究・教育事業体の構築を目指しています。歯学としてもいろいろ考慮しなければならないことがあります。この流れの中で、機能してゆくことを考えていかなければならないと考えています。

本年度は、岡山大学歯学部が、第 49 回全日本歯科学学生体育連盟・全日本歯科学学生総合体育大会の主管を務めます。日頃の学生のサークル活動を応援したいと思います。

今回は、教育のことを中心に皆様にお知らせしました。歯学部長 2 年目を迎えますが、この 1 年間どうぞよろしくお願いいたします。



学生主体のウェルカム交流会
インドネシア、ベトナム、台湾、タイ、ブラジル、チリ



Student Dentist (SD) 認証式

「大学院教育改革と医歯薬学総合研究科歯学系の現状分析」

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科

副研究科長 大原 直也

昨年4月から岡山大学大学院医歯薬学総合研究科の副研究科長を拝命しております。私の前は浅海学部長が務められていました。

最近「教育改革」という言葉をよく耳にされていることと思います。大学における「教育改革」というと学部教育を思い浮かべられる方も多いと思いますが、その範囲は大学院教育にも及んでいます。岡山大学は平成 26 年度に「研究大学促進事業」、「スーパーグローバル大学創成事業」に採択され、さらに昨年度からの「第 3 期中期計画・中期目標」を策定する中で、「卓越した成果を創出している海外大学と伍して、全学的に世界で卓越した教育研究、社会実装を推進する取組を機能強化の中核とする」ことを選択しています。このような背景もあり、一昨年から大学院教育構築ワーキングにより全学的な大学院教育改革が持続的に検討され、「岡山大学 大学院教育改革の基本方針」が策定されました。これに関連し、医歯薬学総合研究科歯学系の教育について、歯学系の現状を分析する機会を前任の浅海先生から引き継いで得ましたので、ここではその一端に触れたいと思います。

「岡山大学 大学院教育改革の基本方針」の中心となるのは「大学院教育改革 4つの柱」で、これは 1)人材育成目的の明確化、2)学位の質保証、3)組織的な教育プログラムの実施、そして 4)グローバル化、異分野融合の推進からなります。

1)人材育成目的の明確化

従来は主に学問領域から大学院教育プログラムは策定されてきましたが、修了生の希望・進路の視点にも重きを置くこと、多様で常に変化する社会的ニーズに応え得るべく、社会現場での実践型教育を充実させること、質の高い教育・研究を保証し国際的競争力を高めるため、必要に応じ、領域の選別・重点化を進めることが謳われています。これに対して歯学系では「一般コース」として学ぶ学生に加え「臨床専門医コース」で学ぶものが多く、しかもほとんどの者が歯科医師臨床研修後に入学しており、専門医の取得も見据えながら学位取得を目指しています。こういったことからキャリア教育・支援という観点からもすでに取り組んできたと言えるでしょう。

人材育成に関連し、大学院生の定員充足に触れておきます。大学院にとって最も重要なのが「優秀な学生の確保」であり、そして「優秀な修了生の輩出」です。医歯薬学総合研究科は文字通り医学系、歯学系、そして薬学系からなっていますが、歯学系では研修医制度がスタートし、大学院生の確保が困難であった平成 18 年の翌年から今年に至るまで、歯学系に割り当てられた定員 32 名を超える学生数を確保し続けています。全国的に大学院生数の充足に難渋している大学が多い中、充足を続けて来られたことは、教員をはじめ、関係の皆様方のご努力があったからです。とはいえ、安堵できない状態にあります。現状、大学院生の多くは岡山大学病院で研修された方です。岡山大学病院は歯科医師臨床研修マッチングプログラムにおいて例年ほぼ 100%のマッチング率です。しかし、研修予定者が国家試験に不合格になるとご案内のよう

に実際の研修医数が減少します。昨今の歯科医師国家試験合格者数には厳しいものがあり、研修医数が減少すれば、その後に大学院生となる方も人数も減ることになりかねず、毎年の懸念事項となっています。

2) 学位の質保証

ここでは厳正な学位審査、中間評価の導入、そして自己評価点検の持続的実施が謳われています。歯学系では従来指導教員が学位審査において主査になることはありませんでしたが、審査員(副査)として加わることが慣例となっていました。これには理由があり、歯学系における研究内容が学問領域として多様であり、しかもそれぞれの専門領域の特性が高いためです。しかし、厳正な学位審査といった観点からすると、審査員としても審査には関与しない方が透明性は高くなります。このため、今年度からは基本的に指導教員が学位審査に加わることが無いように規程の改正がなされました。外部評価についてはこれまでも大学全体、あるいは歯学部ではこれまでに種々の機関に行っていただきました。しかし、大学院として歯学系は受審していません。今後の課題として残されています。

3) 組織的な教育プログラムの実施

医歯薬学総合研究科では医学系、歯学系、薬学系の3つの学系を跨いで7つの履修コースが設定されており、歯学系の学生はその中で「一般コース」、「臨床専門医コース(歯学系)」、「分子イメージングコース」の3コースが履修可能となっています。そして、『研究方法論基礎・応用』と『課題研究』が共通コア科目として整備されています。大学院教育においても豊かな教養の涵養を図ることが求められるようになってきましたが、『研究方法論基礎・応用』が教養授業に相当するのではないのでしょうか。現在医療系の授業に限られており、さらに広範な教養を得ることが求められるのであれば、今後の検討課題となるでしょう。課題研究の成果は夏季と秋季に開催される『課題研究セミナー』で発表され、『課題研究』の単位認定がなされます。年度当初に予定する授業に加えて、各分野主催のセミナーや学術講演会も、授業の一環として開催されており、基盤的共通科目の充実を図っています。

学士課程プログラム(学部教育)との連携も問われ始めていますが、博士課程の学生のほとんどは歯学科を卒業した学生です。彼らは歯学科を卒業時に歯科医師免許を取得、1年間の臨床研修を行った後に博士課程に進学してきます。すなわち、臨床研修期間が学士課程と博士課程の間に存在するため、学士課程のプログラムとの連携が難しい状況です。今後臨床研修期間を含めた検討が必要となってくるかもしれません。

4) グローバル化、異分野融合の推進

岡山大学は前述のように「スーパーグローバル大学創成事業」に採択されており、海外との交流には力を入れています。歯学部ではこの数年間、歯学国際交流演習(ODAPUS)参加学生数(海外への派遣学生数)、国際交流協定締結校からの受け入れ人数ともに順調に増加しています。一方、医歯薬学総合研究科歯学系でも海外からの受け入れ人数は増加傾向にあります。大学院生の海外派遣、特に在学中の派遣については苦慮しているところで、規定や制度設計を含め、大学院生がもっと海外に出やすいように検討を始めているところです。

外国人留学生の受入れ分野における専門領域の指導には概ね問題が無いようですが、博士課程の共通コア科目である『研究方法論基礎・応用』に対しては不満の声も聞こえてきます。配布資料や授業中のスライドを英語化する等の配慮を進めており、さらに一部の授業は、Medical Science Series としてすべて英語化した授業シリーズも用意されています。しかし、配布資料やスライドが英語化されても講義そのものが英語で無ければ理解が難しいことは否めません。逆にすべて英語化してしまうと日本人学生が専門外の領域の講義を理解することが難しくなる、という事態にもなりかねず、判断が難しいところです。両者の妥協点を見出す作業が必要となってくるでしょう。

岡山大学全体の問題点としては留学生を受け入れる施設が恒常的に不足していることです。特に鹿田地区には宿泊施設が無く、留学生にかなりの不便をかけていることは否めません。

以上、今回の分析の一端を紹介させていただきました。博士課程を中心に書きましたが、歯学系には4年生学部を卒業された方などを対象とした修士課程(医歯科学専攻)もあります。これについては次の機会にしたいと思います。皆様方には歯学系の現状をご理解いただき、引き続き優秀な大学院生の確保と指導にご協力とご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

「平成 29 年度の岡山大学病院歯科系の診療方針」

岡山大学病院副院長 診療(歯科)担当

宮脇 卓也

この 4 月より、岡山大学病院の診療(歯科)担当副院長を拝命いたしました。皆様よろしくお願ひ申し上げます。昨年度までの 6 年間、歯科系の教育・研究担当の副院長をさせていただいておりましたが、ご理解、ご協力、ご支援いただきました皆様には感謝申し上げたいと存じます。これから、昨年度までと違った課題に取り組むことになりましたが、まずは昨年度まで診療(歯科)担当副院長をしていただいた、飯田教授に感謝申し申し上げます。特に、昨年度の歯科特定共同指導という大きな難局を乗り切っていただき、その功績は大きいと存じます。また、その際に中心になって取り組んでいただいた浅海教授、鈴木講師、柳講師並びに関係各位に、感謝の意を表したいと存じます。今後ともご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

さて、今年度(平成 29 年度)の歯科系の診療方針について、4 月早々に以下の 6 点を挙げさせていただきます。

1. 歯科診療報酬の増加
2. 先進的な歯科医療の推進
3. 歯科医療安全管理・感染対策の定着
4. 歯科診療内容の「見える化」
5. 国際的歯科医療教育拠点の整備
6. 働きがいのある歯科診療環境の構築

これらは、金澤病院長にもご了解をいただいて、公表させていただいたもので、病院全体の方針と方向性は同じですが、私が特に強調したいものです。

まず、歯科系の診療面の責務として、健全な経営基盤を維持する必要があります。具体的には、歯科系として収支バランスをプラスにするというよりも、前年度よりも歯科診療報酬の増加することを目標にする必要があります。昨年度は前述のとおり歯科特定共同指導があったため、一昨年度よりもプラスになりました。まずは、この落ち込みを挽回することを何よりも最優先にしたいと存じます。そのため、単に患者数を増やして診療報酬を増加させるというより、基本的には単価を増加させて、全体の診療報酬が上がるような体質に改善したいと思っております。患者数を増やすだけでは、診療効率も落ちますし、いずれ破綻するのは目に見えています。それに我々の大学での時間は診療だけに費やすことはできません。単価を上げるための方策として、歯科経営委員会で方策を練っていただいております。また、単価を上げるのと同時に、大学病院でしかできない高度な医療、先進的な医療を推進し、質の高い医療を患者の皆様を提供することが我々の使命だと思っております。また、日常の診療であってもそれらの臨床データを集積・分析して、新たな知見を見出すことも大学病院の役割だと思います。

次に、歯科医療安全管理・感染対策は、診療の基本となるもので、金澤病院長も医療安全を重視することを明言されておられます。すでに十分な歯科医療安全管理・感染対策がとられているものと判断しておりますが、大学病院はスタッフの入れ替わりが多く、新しい歯科医療を導入していることが多いですので、常に身近な安全対策に留意して下さいようお願いいたします。

前述のとおり、高度な医療、先進的な医療を開発・実施することが大学病院の役割であり、すでに各診療科等ではそのような専門的な診療を実施されておられます。しかし、残念ながら歯科の診療は、大学病院外から見えにくいのではないかと感じております。大学内であっても、十分には知られていない可能性があります。これは、大学病院にと知られていないということは、大学にとっても「もったいない」ことであり、また、それを必要としている患者の皆様にとっては不利益なことです。そこで是非、大学病院での歯科診療の内容を知ってもらうための「見える化」を推進したいと思います。そのためには、ホームページの充実が必要であり、また診療組織の改変が必要ではないかと考えております。関係各位にご相談、ご協力をお願いすると思いますが、何卒、よろしくお願いいたします。

岡山大学病院は、「外国人患者受入れ医療機関認証制度(JMIP)」を受審し、国際的な診療拠点としての地位を固めつつあります。海外から日本に歯科診療に来られることもあるとは思いますが、大学病院の歯科は、むしろ海外の歯科医療従事者の教育の場としてのニーズが大きいのではないかと考えています。具体的には、外国人医師修練医制度で海外の歯科医師を積極的に受け入れることができると思います。ただ、体制整備には相当の組織、時間、予算が必要ですので、継続的に推進する課題だと考えております。

最後に、方針の最後の挙げさせていただいた「働きがいのある歯科診療環境の構築」ですが、皆様は常々感じておられると思いますが、年々、個人個人の仕事量が増えてきています。感じてだけでなく実際増えています。仕事を嫌々していると苦痛でしかないでしょう。でも、評価されている限り仕事は減ることはないと思います。では、増える仕事にどのように向き合えばいいのでしょうか？ その答えは、「仕事にやりがいを持つ」「自分の仕事を好きになる」ことだと思います。我々医療従事者は、その点恵まれています。患者さんから目の前で感謝されますし、また、岡山大学病院でしかない医療を受けに来ていただいた患者さんに「岡山大学に来てよかった」と感謝してもらえることは最高の喜びです。また、患者さんだけでなく、歯科医療従事者に対して岡山大学でしかない臨床教育を提供することも、大きな喜びです。そのような歯科医療や臨床教育を提供することのできる環境を作っていくことが、「働きがいのある歯科診療環境の構築」に繋がると思います。

以上の方針を達成するためには、歯科の構成員の皆様のご理解、ご協力、ご支援が必要です。何卒、よろしくお願い申し上げます。

「歯科教育・研究担当副病院長に就任して」

岡山大学病院副病院長(歯科系教育・研究担当)飯田征二



このたび歯科教育・研究担当副病院長に就任いたしました。よろしくお願い申しあげます。この機会つかわせていただき、現在直面し、早急に対応すべきことについてお伝えし、ご理解をいただければと考えております。

1)教育について

現在、歯科医学教育はこの20年では2回目となる大きな改革が行われることが想定されています。1回目が、OSCE、CBTという卒前臨床実習過程に進む前の段階で、実際の患者診療にあたる上で十分な歯科医師としての応接能力、ならびに医療知識を備えたかを客観的な判断が行われる試験の導入でした。現在、その効果もあり臨床実習前において学生のプロフェッショナリズム意識の形成がなされ、Student Dentistの名称のもと、安心して患者治療への参画ができる状況となってきました。今回の改革は、「診療参加型臨床実習後客観的臨床能力試験」という名称で臨床実習終了段階で実習において培われた医療技術ならびに医療従事者としての患者マネジメント力を、実際の患者診療での評価する試験(臨床実地試験)と、模型を用いて歯科医療技術を評価する試験(一斉技能試験)の2本だてからなり、全国基準で評価されるもので、単位認定に影響する試験として現在実施に向けて進められています。35年以上前の歯科医師国家試験には、人工歯配列や歯型彫刻、インレー形成などの実技試験が実施されておりましたが、今回の内容がそれを想定させるものとなっており、時代の逆行のように思われます。しかし、逆にこの時期に本試験制度が導入されるのは、合格が簡単ではなくなった歯科医師国家試験への対策を中心とした他大学での卒業前の教育体制や、学生に診療機会の提供という名目にそぐわない臨床実習の実態に対しての歯学部教育への警告ともとらえることができます。

昨今の患者意識の変化により、臨床実習では積極的な患者への学生による処置がなかなか困難となってきた時代背景のなか、本来の臨床実習として学生に積極的な技術的教育を実施する方向性が示されました。しかしながら、開業歯科医院が増え、患者自身が大学病院は先進的な高度な医療を提供してくれる場として認識し、それを求めて来院することが多いなか、学生への教育の場としての大学病院の認識(学生に診療を担当させる)は、昨今薄れてきています。ご存知のように紹介状なしで受診することすら、選定療養費が加算され、受診しにくいハードルすら形成されております。しかたがって、患者より学生による診療の同意を取る上では、主治医である指導医と患者との強い信頼関係がなければ、このような教育環境を学生に提供することは困難であり、また、その学生が行った内容にもずっと責任を持ち続けなければなりません。ただでさえ、診療、研究と負担が大きい学生指導担当の先生方へのさらなる精神的な負担を強いることはできるだけ避けたく、自学自習環境の見直しなど、学生の技術的向上がなされる環境を新たに構築し、中央

あるいは国民が求める理想的な卒業生を作り上げられればと考えております。よろしくご理解とご協力をお願い申し上げます。

2) 研究について

現在、国立大学歯学部附属病院長会議ではいくつかの解決すべき大きな課題がありますが、その中で歯科領域からの先進医療の申請が少ないことが挙げられ、これを国立大学病院主導で改善することが示されています。以前より、いろいろなところで足並みがそろわない国立大学歯学部ですが、この度は一致団結して解決すべく、この附属病院長会議の下部組織として先進医療の開発推進を目指して「歯科臨床研究推進会議」が設置されました。また、この会議をもとに各病院に先進医療の開発のベースとしての施設として「歯科口腔検査センター」を設置することが進められています。センター化することでデータの集約化などを図り、新たな医療の開発に向けて診療科の枠を超え、効率的に推進する組織として、また、大学間での連携を図りやすい環境を整えております。岡山大学病院ではすでに新医療開発センターなど臨床研究中核病院としての体制ができておりますが、本組織は、大学単位ではなく国立大学歯学部がひとつの単位として動くための組織として理解していただければいいかと思えます。こういった背景から、今後、歯科での研究担当の副病院長として、積極的に臨床研究について包括をしていかななくてはならず、現在、先進医療の開発を目指して臨床研究に従事されている諸先生がたには、ご協力を賜るかと思いますので、よろしくご理解をお願い申し上げます。

「定年退職にあたって」

口腔機能解剖学分野

杉本 朋貞

1991 年 4 月に歯学部教授として岡山大学に着任し、学部などの改組を経て大学院医歯薬学総合研究科教授として定年を迎えようとしています。着任第一日目、映画やテレビドラマで見かける社長室のように豪華な教授室に驚いたことを思い出します。家具類はすべて木目調で統一され、重厚な雰囲気でしたが、応接セットの陳列棚以外には書類や書籍を保管する場所がないことに唖然としました。教授室にあっては用途不明の家具類や大型のテレビセットなどを廃棄し、空いたスペースにスチール製の書類キャビネットや本棚を購入設置して、前任地から持ち込んだ書類や資料を収納しました。

今年 2 月になって学部 3 年生の解剖実習が終盤に近づいてからは、教授室の明け渡しの準備を始めています。とくに感慨深いのは研究資料の扱い方の変遷です。私より 10 年ほど先輩のある先生は、「大学院に入学したての頃、図書館に籠って学術論文の必要箇所を手書きでノートに写したり、青焼きのコピー機を使わせてもらったりしたものだ」など思い出を話されていました。私は前任者と 26 年の年齢差があることから、教授室のセットアップにカルチャーショックを受けたことに無理はないのかと頷けます。私が大学院の頃はゼロックスコピーが全盛で、読みたいものをいちいちコピーしていると、たちまち机の上がいっぱいになってしまいました。というより、とりあえずコピーしておいて、時間のあるときに読もうなどと安易な考えをもっていたために、不要なコピーの増殖がおこったものと反省しています。1980 年代になると、読みたい論文は図書館内での閲覧だけで済ませるように努力しましたが、複数の論文を並行して執筆するとき、手元に置きたいものだけに限定してもコピーの量は増える一方でした。2000 年代に入ると、学術雑誌の電子化が急激に加速され、2010 年頃までには図書館に物理的に入館することがほとんどなくなりました。必要な文献の大部分は欲しいときに電子ジャーナルにアクセスすれば入手できるようになっています。

解剖学では研究データの保管方法として写真が重要です。私の教授室のなかで文献コピーと並んで大きなスペースを占めてきたのは大量のネガとプリントです。主に光学顕微鏡写真を収めた 35mm のロールフィルムだけでも大変な量でしたが、電子顕微鏡写真のネガはサイズが大きい（約 11×8cm）うえに恐ろしい数（生データとして価値のないものを除いても 3,000 枚ほど）で、さらに印画紙にプリントされたものも沢山でてきました。私がフィルム式のカメラで撮影した写真を雑誌に投稿したのは 2000 年頃が最後だったように記憶しています。現在では画像データも電子化され、フィルム式カメラを入手すること自体が難しくなり、自分で写真暗室の作業をすることもなくなりました。

研究に必要な情報量はこれからも増加の一途をたどると思われますが、その保管に必要な物理的空間は大幅に縮小されています。私の後任としてこの部屋に足を踏み入れる方は、この広い空間と、それを埋めるキャビネットをみてどんな感想を持たれるのか、興味深いことです。

「転出のご挨拶」

柳田 矯正歯科かなこ小児歯科クリニック院長

岡山大学病院 矯正歯科 診療講師

柳田 剛志

岡山大学病院ならびに岡山大学歯学部の皆様におかれましては、ますますご健勝のことと存じます。

このたび 2016 年 3 月 31 日付にて岡山大学病院矯正歯科講師を退職し、兵庫県にて柳田矯正歯科かなこ小児歯科クリニックを開院致しました。

思えば 18 歳のときに岡山大学歯学部に入學して以来、19 年間にわたりほぼ毎日、岡山大学歯学部の旧時間外出入口を通過したことになりますが、退職して 1 年たった今、岡山で生活していたことがまるで遠い昔のことに思われます。

退職して開院する決心をしたきっかけは、理容師であった父が脳梗塞で店を閉めることになったことと、私の地元である兵庫県小野市に矯正歯科専門医院が無かったことです。患者さんはこれまで非常に遠方の矯正歯科医院に通院されていたようでした。

実は大学院を卒業して 2 年目の年(今から 8 年前)にも、地元で矯正歯科医院を開業しようかと考えたことがありました。しかしこの時、地域で唯一の矯正歯科専門医として、どんな症例でも受け入れられるという自信が無く、怖くて結局開業することはありませんでした。この思いがきっかけとなり、どんな患者さんでも引き受けることができる矯正歯科医になりたいという気持ちが生まれたことを覚えています。

岡山大学病院は、そのような歯科医師像を追求する私に素晴らしい環境を与えてくれました。岡山大学病院に 7 年間教員として勤務させて頂きましたが、矯正歯科の先生方はみんな真摯に診療や研究に取り組み、ともに技術や知識を研鑽することができました。また他科の先生方は非常に親切で、質問や相談もたくさんさせていただくことができ、矯正歯科に関連する他分野の歯科医療についても多くのことを学ばせていただきました。

もちろん今でも自分の矯正歯科治療に自身が持てるようになったわけではありませんが、大学で勤務した 7 年間の経験や出会いは、非常に多くのことを歯科医師としての私に与えてくれました。

これまで一緒に仕事をしてくださった岡山大学病院の全ての先生方に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

退職後も上岡教授より診療講師にご推薦頂き、ときどき診療室でお仕事させていただいておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

また、現在は主に自分の医院でお仕事をさせていただいておりますが、開業当初より、岡山大学歯学部の同窓の先生方からはたくさんの患者さんをご紹介いただきました。

先生方のお支えにより、順調なスタートを切ることができたと思っております。

重ねて感謝申し上げますとともに、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

「退職のご挨拶」

徳島大学大学院医歯薬学研究部 顎機能咬合再建学分野

大島 正充

この度、平成29年3月末をもちまして、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科インプラント再生補綴学分野を退職いたしました大島正充です。岡山大学に20期生として入学して、人生の半分にもなります18年間もお世話になりまして、心より御礼を申し上げます。

思い返してみますと、学生時代は十分に勉強もせずに同級生・先輩・後輩と密な時間を過ごさせていただき、多くの楽しい思い出がたくさんあります。特に、所属していたサッカー部の皆様には公私にわたりお世話になり、私の人生観や進路にも大きく影響しました。

私は岡山大学を卒業後、窪木拓男教授のインプラント再生補綴学分野の大学院生として、歯科補綴学とともに基礎研究の重要性和面白さを教わりました。最初は大学院生になるつもりも、自分が研究を行うことを想像もしていませんでしたが、今となっては研究者としての進路に導いてくださった窪木教授や医局の先輩方に感謝しています。また、プロフェッショナルとしての仕事のやり方・取り組む姿勢についても十分にご指導をいただいたものと思います。大学院卒業後は、歯の再生研究で著名な東京理科大学(現:理化学研究所)の辻孝先生の研究室にポスドクとしてお世話になりました。研究に対する考え方、成果を見据えた研究計画の立案方法など、研究者としてのノウハウ・人生観をご指導いただき大変感謝しております。当時は休日も睡眠時間も少ない生活で、人生の中でも最も苦しくも実りある時間であったと思います。また、この期間を乗り越えてこられたのは、岡山大学インプラント再生補綴学分野でのご指導があったからこそと強く感じております。

この4月からは、徳島大学大学院医歯薬学研究部顎機能咬合再建学分野(松香芳三教授)のもとでお世話になっております。私は生まれが香川県の東かがわ市ですので、環境や空気感を懐かしく感じています。今から、阿波踊りをはじめとした徳島県の文化に触れることを楽しみにしています。お近くに来られた際には、ぜひお声がけください。臨床・研究・教育におきましては、これまで以上の努力を重ね、歯科医療・歯学研究の発展に貢献したいと思います。場所は移りましたが、今後とも変わらぬご指導をよろしくお願い申し上げます。

「転出のご挨拶」

医療法人賀新会玉島第一病院

前川 享子



岡山大学歯学部の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

このたび、岡山大学病院スペシャルニーズ歯科センターを退職することとなりました。在任中は教授の江草先生をはじめ多くの先生方に大変お世話になりました。

私は岡山大学歯学部 18 期生で、平成 15 年卒業後 14 年間岡山大学に所属させていただきました。障害者の歯科治療に興味があり、研修医として現スペシャルニーズ歯科センターに入局したところ、同時期に摂食嚥下部門が開設されました。授業ではほとんど学んだことのなかった摂食嚥下リハビリテーションの奥深さに触れ、高齢者や障害児・者の歯科治療をするためには必須の知識、技術であると考えようになりました。当時大学院生として所属する講座がなかったため、学生時代水泳部でお世話になった岸教授のご厚意により、歯科放射学講座の大学院生として在籍させていただくことができました。修了時には浅海教授、歯科麻酔科宮脇教授に大変お世話になりました。その後スペシャルニーズ歯科センターにて医員、助教を務めさせていただきました。外来・病棟ともに関わってきましたが、幸いなことに、岡山大学病院では医学部との連携も非常によく、超急性期を含めたほぼすべての病棟からご依頼をいただいて臨床を行うことができ、小児から高齢者まで、様々な病態を知ることができました。NST や周術期管理チームとの連携も非常に勉強になりました。また、当科で行っている摂食嚥下リハビリテーション従事者研修会初級・上級コースや食支援ネットワーク、Gulp Meeting (症例検討会) などの開催にかかわることで、様々な職種の熱意ある先生方と知り合うことができ、大変刺激をいただきました。感謝しております。

岡山大学病院では先生方に見守っていただき、温かい環境で楽しく仕事ことができました。本当にありがとうございました。

今後は医療法人賀新会玉島第一病院(プライムホスピタル玉島に名称変更します)にて常勤として一般歯科を中心に行ってまいります。岡山大学口腔外科(再建系)のお力添えもいただきつつ、地域の歯科口腔保健の向上に努めたいと考えております。摂食嚥下リハビリテーションは当然しっかり行っていく予定です。外来で嚥下造影検査ができますので、近隣の開業歯科医院などの先生方に、気軽にご相談いただければと考えております。

最後になりましたが、岡山大学歯学部の皆様の方々の益々のご健勝とご多幸をお祈り申し上げますとともに、このような貴重な機会を賜り、厚く御礼申し上げます。

「2 度目の着任ご挨拶」

矯正歯科

石原 嘉人

2016 年 9 月 1 日よりハーバード大学歯学部 (Harvard School of Dental Medicine) から岡山大学病院矯正歯科の助教に着任させて頂きました岡山大学歯学部 19 期生の石原嘉人と申します。今回 3 回目の「歯学だより」への寄稿依頼を頂いたのですが、1 度目は 7 年前の助教着任時、2 度目は 2 年前のアメリカ留学中とターニングポイント毎に御挨拶の機会を与えて頂き有難い限りです。この原稿を執筆している現在、既に帰国後半年が過ぎようとしております。当初はアメリカでの生活とのギャップに戸惑う場面も多々ありましたが、そこはやはり母校という事もあるのか現在ではすんなりと適応しております。臨床と教育に関しては、留学期間中のブランクを補うべく新人の時の様な気持ちで謙虚に向き合いたいと思っております。

昨今『ダイバーシティ (Diversity: 多様性)』というキーワードをよく耳にするようになりましたが、岡山大学歯学部においてもその波は年々確実に押し寄せているように感じます。現在、歯科矯正学分野には 2 人の外国人大学院生 (ミャンマー人と中国人) が所属しておりますが、その 2 人を含めたメンバーと協力していくつかの研究プロジェクトに取り組んでおります。必然的に実験指導や研究のディスカッション、さらにはノミネーションの場面でも会話は主に英語です。多国籍なメンバーで構成されていた留学先と類似した環境で仕事をさせてもらうというのは非常に有意義であると感じます。異なる背景や文化、考え方を持つメンバーと同じプロジェクトを進めるというのは苦労を伴うこともあるとは思いますが、この多様性を最大限に活かして独創的・革新的研究が展開できればと考えております。今後とも先生方の御指導、御鞭撻を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

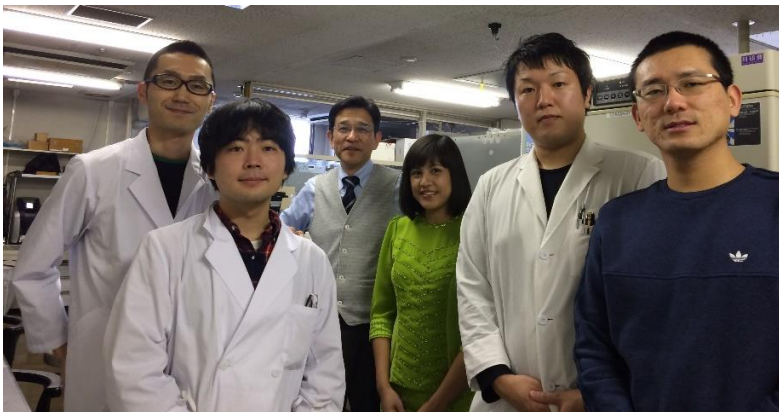


写真: プロジェクトメンバーとの集合写真

「着任のご挨拶」

歯科保存修復学

島田 康史



平成 29 年2月1日より歯科保存修復学分野の准教授に着任いたしました、島田康史(やすし)と申します。この場をお借りし、ご挨拶させていただきます。

私は東京医科歯科大学歯学部を卒業し(1986 年)、同大学歯科保存学第一講座(現う蝕制御学分野)にて接着修復の歯髄刺激に関する研究で学位を取得しました。主任教授の細田裕康先生(現 東京医科歯科大学・新潟大学名誉教授)から厳しさの中にも温かさのあるご指導をいただき、医療人としての倫理観や診療の基本技術、論文の書き方に至るまで、数多くのことを学びました。大学院を修了して開業も考えていたのですが、研究室の人間関係が好きになり、次第に医局から離れられなくなってしまいました。やがて 1994 年シアトルで開かれた IADR にて発表する機会があり、そこで吉山昌宏先生(現 歯科保存学分野教授)との運命的な出会いがありました。当時、吉山先生はジョージア医科大学 Pashley 教授の教室に留学中で、そのころから輝かしい研究成果を挙げられておりました。同じく Pashley 先生門下の佐野英彦先生(現 北海道大学教授)が医科歯科大学から参加していたこともあり、私のような駆け出しにも優しく声をかけてくださいました。その後まもなく医科歯科大学の教授に田上順次先生が赴任されましたが、田上先生も Pashley 教室の同門であり、吉山先生との交流は続きました。その間、米国国際標準局(National Institute of Standards and Technology)と American Dental Association へ留学する機会に恵まれ、Joseph Antonucci 先生、Laurence Chow 先生、Shozo Takagi(高木章三)先生など、世界的な歯科材料学の権威から指導を受けることができました。私にとって本格的に研究に取り組む契機になったように思います。田上教授から光干渉断層計の開発に関する研究(国立長寿医療研究センター、角保徳先生)にも加えていただき、その研究は現在も継続しています。

本学に着任し、周囲の先生方に多大な迷惑をかけておりますが、いつも支えられ楽しく仕事をさせていただいております。微力ながら歯科保存修復学分野の臨床・教育・研究の職務に励み、岡山大学の発展に少しでも貢献できるよう努力したいと思います。今後ともご指導の程、どうぞよろしくお願いいたします。

「着任のご挨拶」

小児歯科
仲 周平



この度、平成 29 年 2 月付けで岡山大学病院小児歯科の講師に着任致しました。

私は、平成 18 年に福岡歯科大学を卒業後、大阪大学歯学部附属病院に研修医として勤務しました。その後、大阪大学大学院歯学研究科分子病態口腔科学専攻小児歯科学教室の大学院に進学し、研究に携わると同時に小児歯科臨床を学ばせていただきました。平成 24 年 3 月に博士課程を修了した後、学部生および大学院生の教育に従事し、医員、助教を経て、平成 29 年 2 月より岡山大学病院に講師として赴任することとなりました。

近年、全身疾患と口腔細菌との関連について数多くの研究報告がなされていますが、これまで、う蝕病原性細菌である *Streptococcus mutans* が及ぼす全身疾患への影響について分析を行ってきました。その中で、非アルコール性脂肪肝炎 (Non-alcoholic steatohepatitis; NASH) の増悪化における *S. mutans* の及ぼす影響について、特に力を入れて研究を行ってきました。そして、

S. mutans の所有する菌体表層タンパクのうち、分子量約 190kDa の高分子タンパク抗原 (PA タンパク) および分子量約 120kDa のコラーゲン結合タンパク (Cnm タンパク) が *S. mutans* の引き起こす NASH 増悪化に関連していることが明らかとなりました。今後は、岡山大学病院において、医科と連携を図り、実際の NASH 患者唾液中の *S. mutans* の分布に関して分析を行う予定です。

臨床においては、小児歯科専門医として、子供の成長を時間軸で考えながら治療をしていきたいと考えております。そして、それぞれの子に合った治療を提供していければと思っております。

最後に、これまでに培った経験を岡山大学で少しでも活かせるように、日々研究と臨床、教育に精進していく所存でありますので、今後とも御指導、御鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

口腔微生物学分野

橘 理人

平成 29 年(2017 年)3 月より岡山大学医歯薬学総合研究科口腔微生物学分野の助教として着任いたしました、橘 理人(まさと)と申します。この場をお借りしまして皆様に御挨拶と自己紹介をさせていただきます。

私は、帯広畜産大学を卒業後、山口大学大学院に進学し博士号を取得しました。その後、山口と東京でポスドクとして勤務し、今回岡山大学に勤務することとなりました。大学での研究室配属から現在に至るまで、細菌、特に病原性細菌、その中でも細胞内寄生菌(サルモネラ、ブルセラ、リステリア、カンピロバクター、レジオネラなど)を対象とした研究を行ってきました。主要な研究テーマとしては、「流産起因菌の感染による流産機構の解明」になりますが、感染性流産と関係のない研究も多くやらせていただきました。岡山大学ではこれまで扱ったことのない細菌を扱えるとのことで、楽しみにしています。

岡山大学に着任して良かったことは新しい細菌を扱えることを含め沢山ありますが、その中の 1 つに実家が近くなった事があります。実家は高知なのですが、今まで(北海道、山口、東京)と比較して、一番楽に帰省することのできる場所となりました。大学院・ポスドク時代は 5 年で 20 分(セミナーのついででした)という帰省時間でしたので、これ以上実家で希少生物扱いされないようにしたいところです。いつの日か、四国新幹線が出来ることを夢見ています。

岡山は今まで縁がなかったかという、そういうわけでもなく、両親が岡山大学を卒業しており、また私は岡山生まれだそうです。当然記憶にはなく、最近まで高知生まれだと思っていました(その後沖縄にも住んでいたそうですが、これも覚えていません)。その他に岡山といえば、大学院生として山口大学に移って初めての研究室配属学部生は 2 人でしたが、2 人とも親が岡山大学を卒業しており、1 人は岡山出身でした。2 人とも博士課程に引きずり込むことが出来たため、今後の活躍を楽しみにしています。

今後は、今まで以上に学生教育・研究室運営に関わる機会が増えますが、経験が少なく、未熟な点も多々あるため、ご迷惑をおかけしてしまうことがあるかと思えます。いち早く岡山大学に貢献できる存在になるために努力していく所存ですので、今後とも御指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

口腔形態学分野

岡村 裕彦

2017 年 4 月 1 日より口腔形態学分野教授に着任いたしました岡村裕彦です。私は三重県伊勢市に生まれ、三重県立宇治山田高校、福岡県立九州歯科大学を卒業後、2004 年 3 月に徳島大学大学院歯学研究科において博士(歯学)の学位を取得しました。その後、日本学術振興会特別研究員、徳島大学・大学院医歯薬学研究部・口腔組織学分野助手、助教、准教授を経て、現在に至っています。

解剖・組織学の分野に興味をもったのは学部学生時代でした。当時九州歯科大学解剖学第一講座で行われていた英語の抄読会に参加しました。骨についての成書で、最初は与えられた部分を訳すのにかなりの時間がかかりましたが、生体組織の美しさ・巧妙さに深く感動したことを覚えています。

少し話はそれますが、私の趣味は“走る”ことで、岡山に赴任してからも時間を見つけて街中を走り、おいしそうな店、きれいな風景が見えるところを探しています。小学校時代の私は、決してスポーツが得意ではなく、運動会の徒競走でも6人走って3番目といったところでした。学校が終わって“おにごっこ”をするのですが、とても学年で短距離一番の子に追いつけるわけはありません。そこで、時間をかけて、一定の距離を保ちつつ、粘り強く後ろからついていくようにしました。やがて学年一番の子の背中は大くなり、追いつくことができました。「諦めなければ、いつかその目標を達成できる」体験は今でも私の生き方の大きな支えになっています。

時は過ぎ、私が研究を始めた 2000 年ごろは、ノックアウトマウスに関する論文がたくさん出されていました(とはいえ、Nature 誌の Figure 1 にターゲッティングベクターの説明がある時代でしたが)。私の当時の実験技術はウエスタンブロットと免疫染色、RT-PCR ぐらいであり、いわゆるスーパーバイザーといった方の存在もなく、1つ上の先輩と試行錯誤しながら実験をしていました。他の方から見れば、小さな石を一つ一つ重ねていくような作業です。ビッグラボがうらやましいと思ったことも1度や2度ではありません。それを求めて留学しましたが、至った結論は、“Drop from the sky” はない。つまり、口を開けて空を見ていても誰も何も落としてくれない、ということでした。そして、自分自身がリーダーになるという自覚が強くなるとともに、多くの方々のサポートを頂くようになりました。それは、学生さんであり、留学生さんであり、一緒に研究を行う同僚でした。私の教育・研究はこのような方々の協力の上に成り立っているものであり、今後も様々な分野の方々と力強いチームをつくり、口腔形態学分野を盛り立てていきたいと思っています。

現在、骨芽細胞を含む間葉系細胞の分化制御における蛋白質脱リン酸化酵素についての研究、口腔微生物由来のエクソソームと歯周病・糖尿病との関連について解析を行っています。赴任から数か月たち、電顕、免疫染色、in situ hybridization といった池亀准教授、内部助教の得意分野に加え、細胞・蛋白レベルから遺伝子改変マウスの形態解析まで、包括的な研究ができる機能的なラボを目指して日々努力しています。解剖学教室の古き良き伝統を継承しつつ、時代に応

じた新しい風を吹き込んでいきます。興味のある学生さん、院生さん、若手の研究者の方々、ぜひ一度、9階の研究室に遊びに来てください。

赴任以来、多くの先生方とお話する機会があり、岡山大学を世界一流の大学にするという情熱に触れ、このような環境に身をおける幸せと責任の重さを感じています。今後ともご指導、ご鞭撻よろしくお願い申し上げます。

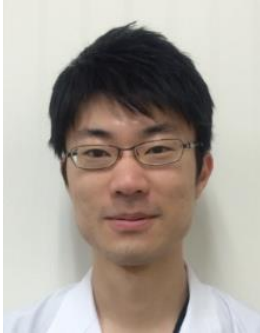


(2017 年 4 月 中国西安にて)

「着任のご挨拶」

歯科放射線学分野

竹下 洋平



平成 29 年 4 月 1 日から岡山大学大学院医歯薬学総合研究科歯科放射線学分野の助教に着任致しました、竹下洋平と申します。この場をお借りしてご挨拶させていただきます。

私は、平成 24 年に九州大学を卒業後、国立病院機構九州医療センターにて研修を行いました。口腔外科での研修でしたが、画像診断の重要性和楽しさに興味を惹かれ、平成 25 年に九州大学大学院歯学研究院口腔画像情報科学分野に大学院生として入局しました。ここでは、歯科用コーンビーム CT の定量的画質評価法についての研究を行い、学位を取得しました。研究のみではなく、パノラマなどの単純撮影から歯科用コーンビーム CT、CT、MRI や超音波などの特殊撮影まで幅広い画像診断を担当し、非常に充実した日々を送ることができました。

この度、ご縁があって岡山大学にて勤務することとなりました。岡山大学は研究をはじめ、非常に活発な大学だと伺っています。卒後研修システムも優れており、九州からも岡山大学での研修を選択する学生を多く見てきました。福岡を離れて、岡山での初めての生活となりますが、日々精進して参りたいと思います。

最適な歯科治療を行うためには“診査・診断・治療計画”を正確に行うことが必要不可欠であり、歯科放射線はこの診査・診断に欠かせない重要な分野です。九州大学で学んだ経験を活かしつつ、岡山大学の更なる発展に大きく貢献できれば幸いです。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

予防歯科

片岡 広太



平成 29 年5月1日付で岡山大学病院予防歯科の助教に着任の片岡広太と申します。この場を借りて自己紹介とご挨拶をさせていただきます。

私は、平成 18 年に大阪教育大学附属高等学校池田校舎を卒業し、岡山大学歯学部に入學しました。大学では茶道部に入部し、充実した大学生活を送りました。

大学卒業後は、岡山大学病院卒後臨床研修センターおよび協力施設のなかしま歯科医院で研修を受け、その後大学院に進学、研究室配属時よりお世話になっ

ていた、予防歯科学に入局しました。

大学院では、歯周炎における酸化ストレスの発光イメージングを主に研究しました。今後は口腔局所だけでなく、全身の疾患と酸化ストレスとの関係について研究を発展させられればと考えています。他にも大学生を対象とした疫学研究や、糖尿病患者への臨床研究など、多岐に渡る分野の研究をしました。また在学中に息子が誕生し、研究と育児にと悪戦苦闘の毎日を過ごしています。

子供の教育もままならない自分ですが、5月以降からは臨床実習にも教員として参加します。教員としては不慣れな部分もあり、皆様にご迷惑をかけてしまう場面かと思えます。学生とともに学び成長していければと考えています。

最後にはなりますが、まだまだ若輩ものであり指導者としては未熟ですが、皆様のより一層のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

歯周病態学分野

高知 信介

平成 29 年 5 月から歯周病態学分野の助教に着任することになりました、高知信介と申します。まず、簡単に自己紹介をさせていただきます。私は、平成 21 年に神奈川歯科大学を卒業後、1 年間の同大学での研修を受けた後に、平成 22 年に岡山大学大学院医歯薬学総合研究科・歯周病態学分野に入局しました。大学院ではヒト歯肉上皮細胞の研究を行い、学位を取得しました。大学院修了後は、1 年間鳥取の病院で高齢者医療を学び、その後、群馬県にあるハンセン病療養施設に 2 年間務め、岡山に戻って参りました。

本原稿を執筆時に、入局時からのことを思い返してみると、私が当分野に入局してから、本当にたくさんのことを学び、経験させていただきました。研究や臨床の手技もちろんのこと、患者様の価値観を大切にすること、高柴教授には最初に道の歩き方を教わりました(笑)。本当に入局して良かったと考えています。

今後は教員となり、学生や若手の後輩達を育成・指導していく立場となります。今までに先輩方が私に与えてくれたことに加え、それ以上のことを私より若い世代に与えて、当分野および岡山大学、ひいては日本の歯科医療の発展に携わっていきたいと考えております。

日々邁進していきますので、何卒宜しくお願いいたします。



「着任のご挨拶」

インプラント再生補綴学分野

笈田 育尚

岡山大学 22 期生の笈田育尚（おいだやすたか）と申します。2017 年 4 月 1 日からインプラント再生補綴学に助教として着任いたしました。この場をお借り致しまして、挨拶を申し上げます。

私は 2007 年に岡山大学歯学部を卒業後、岡山大学病院卒後臨床研修センターにて 4 ヶ月間、赤穂はくほう会病院にて 8 ヶ月間、研修を行いました。研修終了後は、インプラント再生補綴学分野に大学院生として入局致しました。

大学院は窪木教授、大野充昭先生（現分子医科学分野）をはじめ、たくさんの先生方に迷惑をおかけしながら、骨髄環境における BMP-2 の骨形成に及ぼす効果の研究をすすめ、なんとか卒業致しました。お世話になりました先生方には感謝を申し上げます。

大学院卒業後は、倉敷成人病健診センター歯科に 3 年間常勤として勤務し、病院歯科における医・歯・薬・看の連携の大切さを改めて実感し業務に携わることができました。この経験はこれからの医療に携わるものとしての礎を築いてくれるものになると感じています。

教員には大きく臨床・教育・研究の仕事がありますが、全てにおいてまだまだ半人前にも至っておりません。微力ながらコツコツこれらの仕事に励みたいと思います。何かとご迷惑をおかけすると思いますが、先生方のご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い致します。

「着任のご挨拶」

歯科薬理学分野

岡元 邦影

平成 29 年5月より、歯科薬理学分野の教授に就任いたしました岡元邦彰です。長崎大学の歯科薬理学教室より参りました。この場を借りまして、簡単ではありますが自己紹介させていただきたいと思います。

私は、九州大学歯学部を卒業する際、基礎へ行こうか迷っていましたが、何を思ったか地元の宮崎医科大学(現宮崎大学医学部)付属病院の歯科口腔外科へ入局してしまいました。1 年目は外来で、埋伏抜歯や癌、口唇口蓋裂、顎矯正などの手術の鉤持ちをして忙しい毎日を過ごしていました。一年くらいたったときに、病棟を担当しながら、大学を卒業するときのことを思い出し、大学院という選択肢もあったなー、と考え始めました。そこで、九州大学へ残っていた同期生にいろいろ話を聞き、4年やってそこでまた考えようと思い立ちました。その当時、口腔外科では医局員数が少なく、本当なら3年目、4年目の先生が行くはずの田舎の診療所へ勤務する歯科医師がいませんでした。どうせやめるのなら少しは役に立ってからやめたいと思い、熊本の県境の西米良村立病院の歯科医師として半年間の田舎暮らしを経験しました。今考えると、研修医を終えたばかりの歯科医師が保険点数のことも知らずに1人で赴任するなんて、なんと愚かなことをしたとことかと怖い気がします。しかし、何とかなるもので大きな失敗もなく半年が終わり、九州大学歯学部歯科薬理学教室での大学院生活が始まりました。当時結婚し、子供もいたため、他の大学院生が12 時過ぎまで実験していたのに対し、比較的早く7 時頃には帰宅していました。そのため、逆に朝は6時過ぎから実験を始める毎日を過ごしていました。幸いなことに、そのようなことに理解のあった教授(当時山本健二教授)で、大学院生時代には、その当時教室では行っていなかった遺伝子を扱う実験をならいに、福岡大学医学部生化学教室(当時池原征夫教授、三角佳夫准教授)へ2年ほど勉強させてもらい、戻ってから遺伝子分野を立ち上げてきました。また、大学院を卒業してすぐに、その当時流行だったノックアウトマウス作製のため、九州大学生体防御医学研究所の中山啓一教授のもとで研究をさせてもらったりしました。これらの時代の研究が私のその後の実験の方向を決定したと言っても過言ではないと思っています。学術振興会特別研究員、九州大学歯学部助手を経て、長崎大学歯学部へ助教授として赴任しました。九州大学では、エンドソーム・リソソームの酵素について、長崎大学では、主に破骨細胞におけるエンドソーム・リソソーム系の関わりについて研究を行ってきました。

今まで回りの方々に支えられて何とかやってこられました。岡山は全く初めての土地で、右も左もわかりませんが、ここでも教室やまわりの先生に温かく迎えられて、頑張らねばと決意を新たにしたところです。これから岡山大学・歯学部のために精一杯頑張らせていただきたいと思いますので、今後ともどうかよろしくお願いいたします。

「着任のご挨拶」

スペシャルニーズ歯科センター

野島 靖子

平成29年5月1日より、岡山大学病院スペシャルニーズ歯科センターの助教へ着任させていただきました、野島靖子と言います。障害を持っている方への歯科診療にたずさわっております。この場をお借りし、自己紹介を兼ねて皆様へご挨拶申し上げます。

高校までは岡山県北部にある桜の名所、津山で生まれのびのびと育ちました。平成13年に北海道大学歯学部へ入学。学部卒業後は兼ねてから興味があった障害者歯科に携わりたいという気持ちが強くなり、研修医から大学院も含めて計6年間、北海道大学大学院歯学研究科口腔機能学講座小児・障害者歯科学教室でお世話になりました。4年前にスペシャルニーズ歯科センターの江草教授より声をかけて下さったことがきっかけで、岡大で仕事をさせていただくこととなりました。更に今まで障害者歯科だけでなく小児も診ていたため、岡大でも同様に「小児と障害者両方を診させて貰いたい」という我儘を聞いてくださったおかげで、小児歯科でも診療に従事させていただくことができました。昨年、一昨年につきましては、産休・育休を取られた先生の代理として助教に就かせて頂き、学生実習などの教育活動へも参加することができました。学生教育に関しては大学でこんなにも違いがあるのかと驚くとともに、先生方や学生さんにもご迷惑をおかけいたしました。北海道へ居た時はまさか地元の岡山で障害者・小児歯科にたずさわることができると思ってもよかったです。このような機会を与えて下さった江草教授、快く受け入れて下さった小児歯科の仲野教授をはじめ、関係の皆様へは心より厚く御礼申し上げます。

専門は障害者歯科だと言うと、どうしてそのような道を選んだのか？と聞かれることがしばしばあります。確かに一般的な開業を目指す上でも足がかりにはしづらく、近年の超高齢社会への対応を考慮し、摂食・嚥下リハビリテーション分野に進んだ訳でもありません。自分は大学に入るまで、病気は薬があれば全部治るもので、薬が無いものが治らないのだと思っていたくらい、何の知識もありませんでした。しかし、学生実習の時、生まれつき・若しくは事故や病気等で障害を持っている人がこんなに世の中に居て、しかも至極楽しそうに診療室に通っている。その姿が強烈に印象的で、私もこんなニコニコしながら通ってくれるような仕事をしたいと思ったことが忘れられず、今日までこの道を歩いています。

障害を持っている方は見えやすい問題、見えにくい問題をそれぞれ抱えています。そしてそれを周りに十分に伝えることができないことが往々にしてあります。目が見えない、脚が動かないなどの見えやすい問題にだけでなく、見えにくい問題にも寄り添い、診療を楽に受けることができるようにつとめ、その中でより良い医療を提供できるよう、他診療科・他職種との連携が重要であると感じております。

甚だ未熟かつ微力ではありますが、診療・教育・研究ともに日々精進し、岡山大学の一助となれるべく精一杯頑張っていく所存ですので、今後ともどうかご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

歯科保存修復学分野

横山 章人



平成 29 年 4 月より大学院医歯薬学総合研究科歯科保存修復学分野の助教に着任致しました横山章人と申します。この場をお借りして自己紹介を兼ねて着任の御挨拶を申し上げます。

私は 3 歳頃から今の瀬戸内市で育ちました。岡山は気候環境が良く子供の頃から気に入っており、父が県内で開業していることもあり将来は岡山で生涯過ごすことを予想し、大学は大阪大学歯学部へと入学しました。卒業研修は大阪大学歯学部附属病院で修了し、岡山大学の歯科保存修復学分野に入局させていただき、岡山に戻ってくることができました。

研究生、医員を経て大学院生時代は主に接着性修復材料に関する研究に携わり、レジンの血液汚染に関するテーマで学位を取得しました。また、複数の開業医にて一般歯科診療や訪問歯科診療に従事し臨床経験を積ませていただきました。ご指導頂いた先生方のご尽力の下、大学院を出て直ぐに助教に任命いただくこととなり、感謝の意を申し上げます。

本年からは臨床、研究に加えて教育にも携わる立場となり、まだ力不足な面もあるかと思えます。これまでの経験や知識を活かし、本学の発展に少しでも貢献できるよう頑張る所存にございます。今後ともご指導ご鞭撻のほど賜りますよう、よろしくお願い致します。

「岡山歯学会奨励論文賞を受賞して」

岡山大学病院 口腔外科(病態系)

村瀬 友里香

この度、以下の論文で岡山歯学会奨励論文賞を頂くこととなり、大変光栄に感じております。

“Yurika Murase、Takako Hattori、Eriko Aoyama、Takashi Nishida、Aya Maeda-Uematsu、Harumi Kawaki、Karen M. Lyons、Akira Sasaki、Masaharu Takigawa、and Satoshi Kubota: Role of CCN2 in Amino Acid Metabolism of Chondrocytes. Journal of Cellular Biochemistry 117: 927-937 (2016)”

私は、大学院在学中、口腔顎顔面外科学分野に所属しておりましたが、2年次から口腔生化学分野にて研究を行いました。本論文は、大学院研究の集大成ともいえる学位論文です。

軟骨細胞から分泌されたCCN2は、様々な生体分子との相互作用を通じて内軟骨性骨化や軟骨の再生を促進します。前々回同賞を受賞された植松(前田)彩先生らの論文で、「CCN2欠損軟骨細胞では、翻訳を担うリボソームタンパク質遺伝子の発現が増加している」ことが明らかにされています。そこで、「軟骨細胞におけるタンパク質の代謝、およびその構成成分であるアミノ酸の代謝にCCN2がなにか影響を及ぼすのではないか？」という仮説が浮上し、本論文の研究がスタートしました。本論文では、「CCN2欠損軟骨細胞では細胞内アミノ酸プールが減少するが、それはCCN2欠損によりアミノ酸の取り込みが抑制されるためではなく、タンパク質合成によるアミノ酸の消費が亢進するためである」ことを示しています。また同時に、「CCN2は軟骨組織の細胞外基質でアミノ酸貯蔵庫として、細胞へのアミノ酸供給を調節する役割を担う」可能性が示唆されました。無血管で低栄養である軟骨において、CCN2によるこのアミノ酸代謝調節は重要であると考えられました。

本研究に本格的に取り組み始めたのは3年次の初夏でした。同期が多くのデータを出していたため、かなり焦りがありました。同腹でWTとCCN2 KOマウスがそろわない(普通はあまり起きない)事件が何回も続き、厄払いに行こうかと思い悩んだ時期もありました。しかし、いつもの確なアドバイスをくださる先生方のおかげで、4年次の9月には無事アクセプトされる運びとなりました。

大学院修了後、口腔外科(病態系)のレジデントとして臨床に励むかたわら、滝川教授にお誘い頂き、先端領域研究センターにて研究を続けさせて頂いております。2017年4月からは歯学部の博士研究員として、同センターにて研究を続ける予定です。

最後になりましたが、ご指導頂きました久保田 聡教授、滝川正春教授、佐々木 朗教授、ならびに共同研究者、多くの研究室の方々に心より御礼申し上げます。また、このような名誉ある賞にご選出頂きました、選考委員の先生方、岡山歯学会会員の先生方にこの場をお借りして深謝申し上げます。

卒後研修センター歯科部門報告

「平成 29 年度における研修歯科医の評価基準の変更について」

総合歯科 河野 隆幸

平成 18 年 4 月に歯科医師臨床研修が必修化されてから 11 年が経過しました。その間、岡山大学病院における歯科医師臨床研修のプログラムも少しずつ変更を行っています。具体的には、チーム医療として周術期口腔管理に関するプログラムを、地域医療として訪問診療に関するプログラムを追加しました。一方、厚生労働省も本制度をより充実したものとするために、5 年ごとに制度の見直しを行っています。5 年目では、新たな研修施設として連携型施設の設置が認められ、訪問歯科診療や地域医療に貢献している小規模歯科医院での研修歯科医の短期間の受入・指導が可能となりました。10 年目では、H28 年 2 月 23 日付けの歯科医師法第 16 条の 2 第 1 項に規定する歯科医師臨床研修に関する省令の一部改訂の通知によって、

1. 研修プログラムに到達目標の達成に必要な症例数や研修内容の追加と終了判定の評価を行う項目や基準の追加
2. 研修プログラムの質の向上のため、研修プログラムの評価項目の設定
3. 臨床研修施設の指定を取り消すことができる要件の追加
4. 臨床研修の中断及び再開出来る要件の追加

が行われました。

必修化 12 年目になる平成 29 年度には、岡山大学病院の研修プログラムにおいても H28 年 2 月 23 日付けの通知の 1 を踏まえて変更を行います。今までは、症例単位ではなく処置単位で研修項目を設定し、研修内容をチェックしていました。結果として到達目標を達成することができたと判断した場合に研修を修了することが出来ました。しかしながら、平成 29 年度からは、厚生労働省の通知に従い、到達目標を達成するための症例数をすべて規定しなければいけません。例を挙げると、当院では外来診療 100 症例、初診患者の医療面接 15 症例、根管治療（抜髄と感染根管治療の合計）4 症例、クラウン・ブリッジ各 1 症例と設定しています。なんだか学生実習に戻ったような感じです。当然、これに満たない場合は研修が未修了となり、研修を延長する必要があります。真面目に研修を行っていれば達成可能な目標であると思うのですが、平成 28 年度の研修歯科医の研修状況を見ると、達成できていない者も何名かいます。症例ベースで基準を明確にすることが良いのか悪いのかは議論の分かれるところだと思います。修了・未修了の明確な基準が出来たことで、診療にあまり取り組まない研修歯科医に対する良い警告になるかもしれません。しかしながら、根管治療 4 症例、クラウン・ブリッジ各 1 症例といった症例単位の研修は、患者単位の歯科診療とはかけ離れた研修となる可能性があるので注意が必要だと思います。

12 年目の歯科医師臨床研修がどのような状況になるかは、現時点ではわかりませんが、研修歯科医も指導歯科医も気を引き締めて臨む必要があるようです。また、必要症例数を明示しているということは、その症例数を研修歯科医に与える義務が我々にもあると考えます。大学病院における歯科の新患数は減少傾向にあります。総合歯科の新患や再来初診だけでは補いきれない

可能性もあります。幸い、当院のプログラムには総合歯科での研修とともに、専門診療科での研修があります。専門診療科での充実した研修があれば、規定した症例数を1年間の研修でこなすことは十分可能だと考えます。

最後にこの場をお借りして、専門診療科の先生方には、プログラムの変更を理解していただくとともに、研修歯科医の研修にご協力くださいますよう、宜しくお願いしたいと思います。

「平成 28 年度 歯科衛生士室 活動報告」

診療支援施設 歯科衛生士室 三浦 留美
千神 八重子

◆歯と口の健康週間イベントを開催

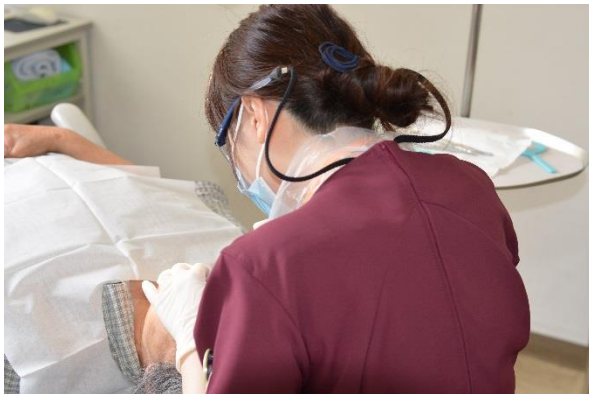
歯科が中心となつて行う毎年恒例の「歯と口の健康週間」イベントを今年は平成 28 年 6 月 9 日(木)に「歯っぴいスマイル 2016～お口の健康をみなおそう～」と題し、医科の協力も得ながら開催いたしました。

イベントの目的は、多くの市民の方々に私たちが行っている「口腔衛生管理の必要性」を学んでいただくことで、大学病院に関心を持っていただき、足を運んでくださることにあります。今年も、わざわざイベントのために大学病院を訪れてくれる方々で盛況なイベントとなりました。

歯科衛生士による体験ブラッシングのコーナーでは、ご来場の方々に「適切なブラッシング法」を理解して頂き「口腔衛生の確立に必要な知識」を学んでもらい、全身健康の源である「お口の健康」の重要性を理解していただけたことと思います。ご参加いただいた方々に深く感謝いたします。

また、今年度は超高齢化社会に向けて在宅医療の重要性を市民の方々に理解していただくために「介護用の人形を使用して高齢者の口腔管理シミュレーション」を行い好評を得ました。

ご協力頂きました諸先生・事務の方々・その他関係各位に深く感謝いたします。



◆日本歯科衛生学会 学術発表賞(公益財団法人ライオン歯科衛生研究所賞)

平成 28 年 9 月 18 日(日)に、広島市で開催された第 11 回日本歯科衛生学会学術大会において、昨年度開催された第 10 回学術大会で発表した当室歯科衛生士 杉浦裕子の「院内腫瘍センターにおける初回外来患者の口内炎症状の調査」が最優秀学術発表賞を受賞し記念講演が行われました。内容は、口内炎の主訴を持つ化学療法中の患者 103 名を対象に口腔内の実態を調査したものです。

杉浦裕子は医科外来の腫瘍センターに配属され医科との連携の中で、がん治療中の患者さ

んに定期的な歯科受診を勧め、口腔衛生管理の重要性について情報提供を行っています。



◆第3回いい歯の日記念企画開催

平成28年11月8日(火)に歯と口の健康づくりに関心と意欲を深めてもらうために「いい歯の日特別企画」として①「歯科医師による無料健康相談」②「お口の菌数測定」③「いろいろな技工物の展示」・医科歯科連絡通路に歯科診療科内のパネル展示を行いました。毎年、県の事業の一環として岡山県歯科医師会と協力して開催しておりましたが、今年度は大学病院と歯学部での開催となり、歯科研修医の協力も得ながらのイベントとなりました。

歯科衛生士室からは細菌カウンター^Rを使用して、ご参加して頂いた方々の口腔内のプラークを採取しその場で口腔常在菌数を測定して正状常在菌数と比較して菌数の多寡を評価しました。自分の細菌数を知って驚かれる方、安心される方、様々でしたが口腔を清潔にする重要性を感じる動機付けの一助になればと考えています。



◆他施設研修

歯科衛生士室では平成25年より他施設研修を行っています。過去、徳島大学病院、広島大学病院、長崎大学病院などに行かせていただきましたが、今年度は事前にアンケートをとり希望する研修施設を決めて行って参りました。平成28年度の他施設研修は①国立岡山医療センター②藤田保健衛生大学病院③静岡がんセンターと3班に分かれてそれぞれ見学研修に行きました。

研修後各班に分かれて学んだことを報告する報告会や研修施設へのレポート提出を行うことでお互いが情報を共有することができ、多施設との交流を深めることに役立てています。

これからも他所を知ることで、自分たちの長所や弱点を見いだして、診療や日々の活動に活

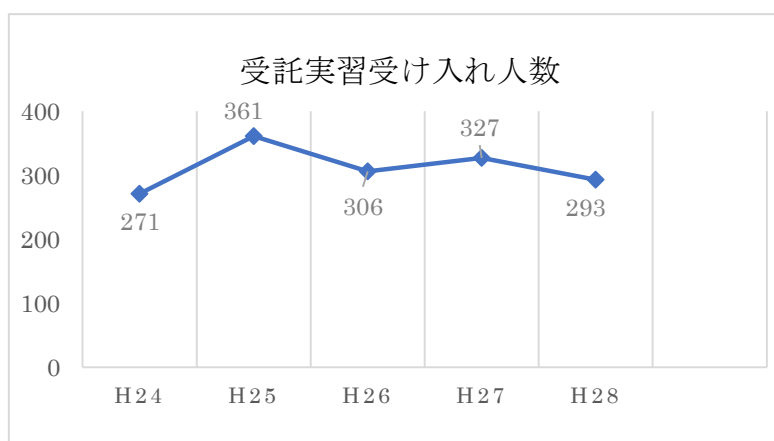
かしたいと考えています。



◆平成 28 度 歯科衛生士受託実習生 実習受け入れ実績

今年度は、歯科衛生養成学校7校より、293 人の受託実習生の受け入れを行いました。各診療科での歯科診療補助実習だけではなく、当院歯科衛生士の参加するチーム医療の見学にも同行してもらっています。当院でしか学ぶことのできない医療現場の知識を、実戦の場で、多くの患者さんに役立ててほしいと思います。

今後も、各診療科の先生方、関係部署の職種の皆様にご協力いただきながら歯科衛生士受託実習生の教育に寄与できればと考えています。



「平成 28 年度 技工室 活動報告」

診療支援施設 技工室

太田 圭二

技工室は 28 年度より竹内士長、神主任の定年退職に伴い上田士長のもと新体制でのスタートとなりました。両名とも再雇用職員として勤務しており以前と同様 8 名の体制となっています。卒後研修センターも含め全診療科から製作依頼を受けておりますが歯科以外にも頭頸部がんセンター、周術期管理センター、NSTなどのチーム医療の一員として広く診療支援を行っています。

稼働開始から 10 年を迎えた 3D プリンターでの実態大臓器立体モデル作製に関しては見学者も多く、口腔外科、耳鼻科、形成外科、整形外科、脳神経外科など多くの診療科から依頼を受けてフル稼働しています。

また今年度より放射線科からの依頼で陽子線治療用具、放射線治療用具の製作も行っております。

ペリオ人材育成研修センターでは「周術期チーム医療認定歯科技工士」を 1 名が取得し周術期の技工に携わる職員 7 名全員が認定を取得しました。

教育および地域貢献として穴吹医療大学、朝日医療大学から技工室見学実習を受け入れ岡山歯科技工専門学院では特別授業を担当しています。

2 年後には 2 名が定年退職の予定で再雇用職員が 4 名の体制となり高齢者の多い部署となりますが医療技術支援部門として医科・歯科連携治療に支援・貢献できるよう努力していきたいと思っております。

第 37 回 岡山歯学会学術集会 歯科技工士セッション報告

平成 28 年 10 月 16 日(日)に第 37 回岡山歯学会学術集会 第 10 回歯科技工士セッションを開催致しました。昨年立ち上げられた岡山歯科技工研究会によって企画・運営されています。

岡山歯科技工研究会は歯科技工士の技術・技能・知識や多職種連携の知識向上に寄与することを目的とした会で当技工室上田(委員長)竹内(顧問)をはじめ全スタッフが深く関わっています。

今回は「変わる歯科技工」をテーマに特別講演では在宅歯科医療の現場から介護や訪問診療に於ける歯科診療の関わり方や多職種連携の重要性、また「咀嚼」の機能だけではない歯科技工物の用途や形態について御講演いただきました。

またシンポジウムでは就労問題等について受け入れる側、送り出す側それぞれの立場の役割として詳細な部分までお話いただきました。引き続き 3 名の講師を中心に歯科技工業界の現状と展望に関して予定時間を越える熱いディスカッションが行われ約 100 名の満員の会場は大いに盛り上がり充実したセッションとなりました。

1. 特別講演:「在宅歯科医療の現場から」
～その技工物の考え方～
講師:山本道代先生(あいの里クリニック・歯科院長)
2. シンポジウム「歯科技工士を取り巻く環境・就労問題等について」
 - ① 「一般社団法人 日本歯科技工所協会の取り組みについて」
講師:南部哲男(一般社団法人 日本歯科技工所協会 理事長)
 - ② 「和田精密歯研(株)における環境改善の取り組み」
講師:近藤誠(和田精密歯研株式会社 岡山ラボマネージャー)
 - ③ 「歯科技工士の養成から就活サポートについて」
講師:松下正勝(岡山歯科技工専門学院 参与)
 - ④ ディスカッション

特別講演



ディスカッション



先進的施設の見学研修

昨年の広島大学病院につづき他施設への見学研修が行われました。

今回は CAD/CAM を中心とした先進的な 2 カ所のラボにお邪魔しました。

1 月 31 日(火)カロス デンタルラボラトリー(兵庫県姫路市)

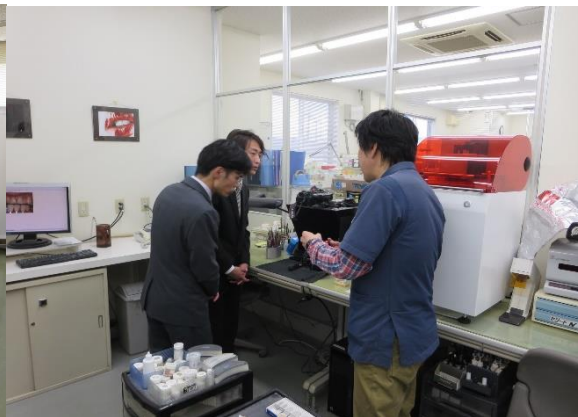
2 月 2 日(木)、8 日(水)和田精密歯研 CP センター綾上(香川県綾川町)

和田精密歯研では見学研修終了後、ディスカッションが行われデジタルとアナログの融合をはじめテクニック的な部分から、仕事の効率化・残業時間減少への取り組み、後進への指導・評価などをプレゼンテーションしていただきました。また、こちらからの質問にも詳細な部分まで伺うことができました。

カロス デンタルラボラトリー



和田精密歯研



特殊歯科技工物の展示

6月9日(木)歯と口の健康週間イベント「歯っぴいスマイル 2016」

11月8日(火)いい歯の日 イベント



「編集後記」

広報誌編集委員長

平野 慶子

皆様のおかげを持ちまして「歯学だより Vol.12」を無事発行することができました。御多忙であるにもかかわらず、執筆の御依頼を快くお受けいただいた諸先生方に心より感謝いたします。この歯学だよりはホームページに掲載されており、どなたでも閲覧可能であるため、岡山大学歯学部
の教員を初めとしたスタッフの方々の活躍を理解していただけるたいへん良い手段ではないかと考えます。少しでもお役に立てれば幸いです。

歯科系広報専門部会(平成 28 年度)委員

部会長 窪木 拓男

総合歯科 白井 肇

むし歯科 山路 公造

歯周病態学 井手口英隆

クラウンブリッジ補綴科 水口 一

咬合・有床義歯補綴科 川上 滋央

口腔外科(再建系) 水川 展吉

口腔顎顔面外科学 岸本 晃治

歯科麻酔科 樋口 仁

歯科放射線科・口腔診断科 村上 純

予防歯科学 竹内 倫子

矯正歯科学 星島 光博

スペシャルニーズ歯科センター 森 貴幸

歯科衛生士室 三浦 留美

歯科技工室 大田圭二

口腔機能解剖学 丸濱 功太郎

口腔生理学 美藤 純弘

口腔生化学 西田 崇

口腔病理学 高畠 清文

歯科薬理学 十川 千春

生体材料学 岡田 正弘

マルチメディア室 小河 達之

－ 協力を頂いた先生 －

口腔微生物学 大原 直也

口腔形態学 池亀 美華

医療支援歯科治療部 山中 玲子

